

(2) 第2期大田市食育推進計画の評価と課題

【評価】

＜評価基準＞ ※前回実績：平成25年度策定時

達成：目標達成

改善：目標未達成であるが前回実績※より数値が改善

維持：現状維持（数値がかわらない）

悪化：目標見達成かつ前回実績より数値が悪化

評価不能：数値等の把握ができず判定が不能

分野	達成	改善	維持	悪化	評価不能	合計
食育の「周知」から「実践」へ	0	1	3	1	—	5
食を通して心身の健康づくり・生活習慣病予防を行う	0	2	0	6	5	13
合計	0	3	3	7	5	18

【評価別の目標指標一覧】

判定	目標指標
達成	—
改善	【食育の「周知」から「実践」へ】 ○食についての学習・体験活動を実施した学校の割合（中学校） 【食を通して心身の健康づくり・生活習慣病予防を行う】 ○朝食を欠食している人の割合（毎日、時々を含む）（1歳6か月児・小学5年生）
維持	【食育の「周知」から「実践」へ】 ○食についての学習・体験活動を実施した学校の割合（小学校） ○まちづくりセンターで、世代間交流・食文化伝承を取り入れた活動の数 ○学校給食における地元産、県内産の食材を利用する割合（品目数）
悪化	【食育の「周知」から「実践」へ】 ○食育に関心を持っている人 【食を通して心身の健康づくり・生活習慣病予防を行う】 ○朝食を欠食している人の割合（毎日、時々を含む）（3歳児・20～70歳代） ○朝食を欠食している人の割合（中学2年生） ○毎日朝食に野菜を食べている子どもの割合（1歳6か月児・3歳児） ○よくかんで食べる子どもの割合
評価不能	【食を通して心身の健康づくり・生活習慣病予防を行う】 ○「食事バランスガイド」等を参考に食生活を送っている人の割合 ○朝食を欠食している人の割合（毎日、時々を含む）（高校生） ○野菜を1日350g以上とる人の割合 ○内臓脂肪症候群（メタボリックシンドローム）の予防や改善のための適切な食事・運動等を継続的に実践している割合（男性・女性）

【課題】

① 食育の「周知」から「実践」へ

- ・食育に関心を持っている人の割合は、前回調査より改善していますが、目標には達しておらず、半数以下です。
- ・子どもから高齢者まで生涯にわたって健康でいきいきと暮らすためには、市民一人ひとりが、子どもの頃から、食に関する正しい知識を身に付け、望ましい食習慣を実践・継続していくことが必要です。
- ・小学校・中学校での食についての学習・体験活動、まちづくりセンター等での世代間交流・食文化伝承を取り入れた活動は、継続して実施しています。今後も、保育園・幼稚園・学校・公民館・まちづくりセンター・食育ボランティア等の関係機関と連携を図りながら、さまざまな機会を通じて食育に触れる機会を設けていくことが必要です。
- ・家族や友人と食事をとることは、豊かな心を育むことにつながることから、食を通じたコミュニケーションを図る施策を推進するとともに、食に関する体験活動の充実を図り、食に対する理解の促進が必要です。
- ・学校給食における地元産、県内産の食材を利用する割合（品目数）については、現状を維持しています。

② 食を通して心身の健康づくり・生活習慣病予防を行う

- ・朝食を欠食している人の割合は、20 歳代男女と 40 歳代男性で高く、4 割程度あります。特に 20 歳代女性では平成 28 年度調査と比較して（食べる割合 63.6%→54.0%、時々食べる割合 36.4%→26.0%、食べない割合 0%→20%）大幅に悪化、20 歳代男性は平成 28 年度調査と比較して（食べない割合 41.2%→22.0%）改善がみられています。
- ・主食・主菜・副菜をそろえて食べることが 1 日 2 回以上ほぼ毎日ある人の割合は、20 歳・30 歳代で低く 4 割弱です。
- ・朝食を欠食する子どもは、3 歳児で 6.4%あります。また、朝食に野菜を食べている子どもは少ない現状です。
- ・大人の生活習慣が子どもの食生活習慣に影響をあたえることを認識してもらい、若い世代からの生活習慣の改善に努める必要があります。
- ・主食・主菜・副菜をそろえたバランスのとれた食生活の実践が生活習慣病の予防につながります。妊娠期から高齢期まで、各ライフステージに応じて望ましい食生活の実践を促進することが必要です。
そのためには、「食」に関する正しい知識を持ち、生涯にわたって正しい食習慣を身につけていくことが必要です。